opusdei.org

29. イエスはマグダ ラのマリアとどのよ うな関係にありまし たか?

彼女はイエス復活の証人として教会の中で尊敬を集めました

2016/09/28

福音書から導き出せる結論は、マグダラのマリアはイエスに大きな愛を抱いていたことです。彼女はイエスにより七つの悪霊を追い出して頂き、イエスにつき従い、自分の持ち

物を出して奉仕しました(ルカ 8,2-3)。そしてイエスが十字架につ けられた時、イエスの母マリアや他 の婦人たちと一緒にいました(マル □15,40-41等)。福音書によると、 復活したイエスが最初に現われたの は、涙を流しながら探していたマグ ダラのマリアに対してでした(ヨハ ネ20,11-18)。このことにより、彼 女はイエス復活の証人として教会の 中で尊敬を集めました(「28.マグダ ラのマリアはどのような人ですか | を参照)。これらの記述からは、彼 女が罪深い女であったとか、まして やイエスの妻であったといったこと は推定できません。

この最後の点を主張する人々は、福音書の外典にその拠り所を求めます。恐らく『トマスの福音書』の核心部分を除くと、それら外典は、歴史的な記述になっておらずグノーシス主義の教えを伝えるために、正典

の福音書より後に書かれたものでした。

これらの作品には福音書と付されて いますが、正確には福音書ではあり ません。これらの書には、復活後の イエスが弟子たち伝えたとされる秘 密の啓示が記されており、マリハム という名の女性(わずかな写本を除 いて「マグダラ」という言葉は出て きません)がその啓示を最も理解す る者として示されています。従っ て、彼女は他の誰よりもイエスに愛 され特別の啓示を受けたとされてい ます。また、これらの幾つかの文書 (『トマスの福音書』、『救世主の 対話』、『ピスティス・ソフィ ア』、『マリアの福音書』)の中 で、使徒たちがこのマリアが女性で あるという理由により彼女に反感を 抱いたことが記されています。これ らの記述はグノーシス主義の一部に は女性を否定的に捉える者たちがい たこと、また、それにもかかわらず

マリアは重要な使徒であったことを 反映していると言われています。し かし、ある研究者は、これらの記述 は、当時、グノーシス主義と戦って いた正統な教会の態度が反映してい ると考えています。つまり、グノー シス主義の中から、女性を霊的な リーダーとして立てるグループが出 て来たのですが、正統な教会はこれ を拒絶したというのです。この意見 には裏付けとなるものがありませ ん。その反感の記述は、むしろ教義 を巡る論争の表われであったと理解 できます。つまり、ペトロと他の使 徒たちの教えに対して、マリハムと いう女性の名で提示されたグノーシ ス主義の考えが論争を引き起こした のでしょう。いずれにせよ、マリア を拠り所にするのはグノーシス主義 の主張を正当化するための方法で す。

他の外典、特に『フィリポの福音 書』では、マリハム(ここでは出身 地のマグダラの名前も付されていま す)は、まさに女性であるという理 中でグノーシス主義の模範として描 写されています。彼女は、キリスト に従いキリストと完全に一致するこ とを霊的に象徴しているとみなされ ています。このような背景から、イ エスがマリアに口づけしたことが語 られています(文献にはそのように 記述されています)。その口づけは キリストとの一致を象徴的に示して おり、グノーシス主義にとっては洗 礼や聖体にまさる一種の秘跡であ り、これを通して自分たちは「グ ノーシス(神秘的知識) | に生まれ ると考えていました。これらの記述 は性的交わりとはまったく関係があ りません。したがって、権威ある研 究者は誰もこれらの記述をイエスと マグダラのマリアとの性的な関係の 歴史的証言とは理解していないので す。当時のキリスト教徒でさえ問題 にしておらず、歴史的にも何ら根拠 のない誤った意見が、しばしば新発

見	である	かのように取り沙汰される
Z	とは、	とても残念なことです。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/iesu-shitsumon-29/ (2025/12/13)